

もう一つの「併合」

荒武一彦

岡山・十五年戦争資料センターの今年のテーマは「韓国併合100年」ですが、「併合」といえば、日本の歴史にはもうひとつ「併合」がありました。それより30年も前、清国と帰属問題が持ち上がっていた琉球を、明治政府が一方的に武力で威圧して「沖縄県」として取り込んだ「琉球処分」（1879年）です。

この「琉球処分」について、いわゆる「8・15ジャーナリズム」の新聞紙面の中で、興味あるいくつかの記事に出会いました。

8月18日付「毎日新聞」一面トップに、「中国から『沖縄返せ』という大きな活字が躍っていました。企画連載記事ですが、中国の歴史学者の間で「明治政府の琉球併合も戦後の沖縄返還も、国際法上根拠はない。中国は沖縄に対する権利を放棄していない」という主張がされるようになっていくというのです。中国では、同趣旨の論文が2006年以降約20本も発表され、反日デモなどでも「沖縄を返せ」と書かれたビラがばら撒かれたりするといいます。中国政府の公式見解は「日本帰属」を認めているわけですから、それほど歯牙にかける議論ではないのかも知れませんが、「中国共産党も、公式見解と違う主張を黙認しているのが怖い」という声を記事は紹介しています。

沖縄・那覇に中国総領事館を開設する交渉もあると聞きました。沖縄には渡来中国人の末裔がしっかりと根付いており、仲井真知事もその子孫の一人だそうです。日常生活でも「中国色」がそこかしこに残っていて、「親中国」の心情も濃いといわれます。

ここで、「琉球併合」の正当性云々を検証する力は私にはありませんが、「琉球併合」を単なる「過去の史実」としてだけ片付けてしまうことが許されるのか—そういう気持ちにさせられました。

また、8月19日付「毎日新聞」に掲載された

ある寄稿文には、こんなことが書かれていました。筆者はジャーナリスト・松尾文夫氏で、「普天間問題」の解決策を説くものでした。「いま沖縄で、琉球処分以来の本土政府の『皇民化』路線、その結果生まれた『ひめゆり部隊』『健児隊』の悲劇までさかのぼる責任の怨念に火がついてしまっている以上、その出口を見つけるのは容易ではない」と分析した上で、「韓国との過去に対するのと同じように、本土からの『痛切な反省』の上に立って、突破口が探れないのか」と示唆に富んだ提言をしていました。

菅首相は「韓国併合100年」談話で、韓国への侵略と植民地支配に「痛切な反省と心からのお詫び」を述べました。併合時代の韓国は、創氏改名、強制連行、従軍慰安婦そして抗日闘争での多くの犠牲者など、数知れぬ「怨」を積み重ねて来まきました。首相談話はこれらに対するものです。

沖縄にも、琉球王国の江戸時代からも含め、日本に対する「琉球併合以来の怨念」が奥深くに澱んでいるのは間違いありません。だから、松尾氏は韓国同様、沖縄にも日本（本土）は「痛切な反省とお詫び」をすべきだし、それが行き詰まった「普天間問題」解決の糸口、出発点になると指摘しているのだと傾聴しました。いま、「負担軽減」や「危険回避」だけが正義名分化されていますが、それで真底「沖縄の心」と向かい合っているといえるのか。本当の問題解決になるのか。いろんなことを考えさせられました。

沖縄戦の惨劇を映画化した「GAMA一月桃の花」を胸を痛めながら観た日、沖縄・興南高校が甲子園で全国優勝しました。「本土」チームをなぎ倒しての栄冠でした。フィーバーする沖縄の人たちの光景が何度もテレビに映し出されました。「怨」を忘れる一瞬なのか、「怨」を押し殺した歓喜なのか。複雑な気持ちで見入りました。（了）